京都教育大学ＦＤニュース

No. 47
2009 年 3 月 19 日
ＦＤ委員：村上登司文、榊原典子、和田尚、泉惠美子

****

京都教育大学大学院教育学研究科の授業アンケート報告

報告の目的

授業アンケートは、院生の学習意欲の改善をはかり、授業担当者が今後の授業改善に役立て、大学全体として教育の質を高めるＦＤ活動に活かすために実施しました。アンケートでは、教員の授業内容や方法を高く評価する意見がありますが、厳しい意見や要望なども多くあります。今回、大学院を担当する先生方の授業改善に役立てていただくために、教育学研究科で行った学生に対する授業アンケートの回答結果の概要を、ＦＤニュースでご報告します。

授業アンケート実施方法

調査方法：メールによる依頼と、回収。
調査時期：２００８年１１月１７日～１２月５日

授業アンケート回答者

調査対象者１８７名の内、有効回答者４８名（回収率　２５．７％）

表１：回答者の属性

専攻	学校教育専攻または障害児教育専攻　１７名			教科教育専攻　３１名
属性	現職教員　１１名	ストレートマスター　３０名		それ以外　７名
回生	１回生　２５名	２回生　２０名	３回生　１名	４回生　２名

回答結果の概要

１．授業内容について

（１）　学校教育専攻の授業内容

学生からの良い評価として次のものがある。選択した授業の内容に大変満足している。各教員がそれぞれ工夫を凝らして実施している。専門性が高いことを分かりやすく説明している。内容自体が他専修の学生でも興味をひくものがあり、面白く、充実したものである。わかりやすくためになる。ある程度ついていけそうな内容にされている、などがある。

回答の中に、より専門性を高めてほしいという意見と、より実践的であって欲しいという意見の対立する考えがある。例えば、研究重視の意見として、研究の視点がどのような経緯で生み出されてきたのか、研究方法や論点を深める内容を取り入れてほしい。その一方で、より実践的であることを求める回答がある。例えば、大学院ではもっと実践の「場」に参加したい。「学校教育実践総論」の授業数がもう少し増えればよい、などである。

（２）障害児教育専攻の授業内容

良い評価として、丁寧でわかりやすく大変勉強になりよかった、先生方の準備がよくなされていた、との回答があった。その一方で、専門的な内容にかたよりすぎて理解できなかっ

た、などである。障害児教育専攻でない学生にとっては専門的過ぎたかもしれない。ゼミ形式の授業において、障害児教育専攻の仲間内の情報が多く、授業内での意見交流が難しい場面があった。また、一部教員に対して、院生に対する無責任な発言や、指導上適切でない言動に対して厳しい批判があった。

（３）教科教育専攻の授業内容

良い評価の回答が多い。例えば、実践的な内容に踏み込んだテーマが多くとても参考になる。興味深く、内容も大変良かった。充実していて、内容の濃い授業である。教育的内容と、専門的内容とを受講者のレベルに合わせて柔軟に対応していた。学生のニーズに応え、授業内容を柔軟にしてくれている。実践的な内容をたくさん取り入れて、教師となったときの糧となる内容であった。他専攻の方々とも交流を持つことができて勉強になる。

教科教育のどの専門性を重視するかについては、次の両論がある。教育重視の考え方として、「～教育特論」「～科教育」の名称の授業が多いが、「教育」とは名のみで教科教育について演習したり、考えたりする内容が少ない。授業が教育学と離れ、高度に専門的になりすぎている印象を受ける。その一方で、教科教育重視の考え方から、小学校向けが中心で　高等学校教育に生かされる授業内容がほとんどない。多くの知識を獲得したいので専門性の高い授業も開講してもらいたい。教科教育専攻の授業が減ってしまい、専門性があまり高まらないので残念、などの回答がある。

２．授業方法について

（１） 学校教育専攻の授業方法

良い評価として、内容も授業方法も良かった。担当の教員と深く論議できるものが多く、積極的に参加でき充実していた。グループ活動等の院生間の交流がある授業スタイルは非常に勉強になり、様々な価値観に刺激される。

旧来の教育方法である、講義形式の授業や、一冊の本を学生で分割して読み各自発表という形式は、好まれていない。つまり図書を輪読して内容発表をするのはあまり好まれていないようである。学生としては、輪読の場合でも踏み込んで深くまで解釈して討議形式で理解が深まるものを期待している。演習の授業で、発表の質が高まるような厳しい要求を学生に出してほしい、との回答がある。

（２） 教科教育専攻の授業方法

良い評価として、授業に工夫が凝らされて、満足している。少人数なので、議論が活発に交わされるところが多いや、先生との距離も近く充実しているなど、少人数制の授業が好まれている。ディスカッションや、フィールドワークにより授業が充実している。議論で内容についての理解が深まり、研究の進め方など院生相互の意見交換などができる。

それに対し、受講者数が多い授業については、単純な講義式の一方的な授業であるとか、おもしろくないなどの回答がある。授業方法改善を望む意見として、教員の専門分野を講義するだけで教授方法に創意・工夫が感じられない。ものづくり実習のようなこともできたらもっと面白そうとの回答がある。授業の準備をあまりしていない教員がいるので、しっかり授業の準備をしてほしい、との意見がある。

３．時間割について

学部から直接大学院に入った学生と現職教員の学生とでは、時間割について相反する要望がある。ストレートマスターからの意見として、授業開設時間が遅いものが多すぎるとの回答がいくつもある。土曜日に開講してはどうかとの意見がある。子どもを抱えた学生からは、遅い時間の授業が取れないので、２・３時限目ぐらいからの授業を増やしてほしいとの意見がある。７限終わりあたりかＪＲの本数が少なくなり、帰りが遅くなるのがつらいとの意見がある。

他方、現職教員からの意見として、夜の時間帯の授業開設を評価するとの回答がいくつもある。６・７時限の時間帯の講義をさらに増やしてほしいとの意見もある。中には、６限目でも間に合わないので７時限目に授業開講することを望む、との回答がある。また現職教員

から、翌年度は現場に復帰するため４・５時限目開講の授業がとれず、とりたくても取れない授業がある、との意見がある。

その他に時間割に対する意見として、水曜日の授業開講希望。土曜日の開講希望。土日の開講希望、などがある。今年度５時限授業は次の年は６時限に、６時限を７時限に、７時限を５時限というようなローテーションの希望。教員免許取得のため学部授業を履修したいが、院の必修と重なり受講しにくいとの意見があった。不開講の科目があり、また時間的に受講できる授業が限られている。夕方と夜の授業が続くとき食事の時間がとりにくい。こうした改善意見がある。行事について、修士論文の中間発表の日を、教員採用試験の日とずらしてほしいとの意見がある。

４．シラバスについて

シラバスの内容をもう少し詳しく書いてほしいとの意見がある。現職教員からは、勤務上都合がつかないことがあるため、講義形式とかフィールドワークがあるなどシラバスに詳しく掲載し、登録前に主な授業計画を知りたい。２回生にとっては、修論のことも考えて授業登録するので、レポートが期間中何回あるのかなどを事前に知り、登録当初にある程度の計画を立て進めたい、との回答があった。

授業名と実際の授業内容が違う、シラバスどおりでない授業があって当てが外れた、との意見がある。評価方法について、出席重視で評価するだけでなく、他の評価方法も少し取り入れて頂きたい。その他に、教科教育専攻向けの開講授業をまとめたものがあれば、との意見がある。

５．施設設備サービスに関する要望

①コピーに関して、研究室近くに自由に使えるコピー機の設置を希望。院生専用のコピーカードを希望（その理由は、授業用レジュメや研究資料など、研究に必要な印刷物がたくさんある）。

②図書館サービスに関して、他大学から文献取り寄せる時の、図書館窓口での支払いが５時までだし、土曜はお金の扱いができない。図書館の文献検索サービスなどを、学生ボランティアでまかなうことがあり貧弱である、との意見がある。

③事務局サービスに関して、大切な手続きが平日の１７時までは大変厳しいので、１８時までに延長か土曜日も事務ができることを希望（注：現在も事前に連絡があれば１７時以降でも事務局で対応している）。

④夕食時には学食が閉まっているが、生協や食堂を遅くまで開いてほしい。

６．その他

開講授業の相互リンクに関して、教職大学院の授業を教育学研究科の者が履修できるようにしてほしい。今後の課題として、免許更新制の講習と大学院の授業をリンクさせてほしい、との意見がある。

最後にＦＤ活動で耳を傾けるべき意見として、「現職学生の勉学状況や大学に対する不満や満足などを調査した先行研究がたくさんあるのだから是非少しでも学びやすい物的・人的環境を構築していただきたい」との回答がある。

コンソーシアム京都による2008年度FDフォーラムに参加して

村上　登司文

ＦＤ委員会委員ということで、２月２８日と３月１日の両日、コンソーシアム京都主催の2008年度第14回目ＦＤフォーラムに初めて出席した。ＦＤ研修会への全国からの参加者は毎年増え、今回は約1200名が参加したという。これ１つからも各大学においてＦＤ活動への関心が非常に高いことがうかがわれる。

第１日目に全体シンポジウムがあり、ＦＤの先進大学である山形大学と金沢工業大学の各学長による報告があった。山形大学からは、教養教育を中心とした学士力の向上の方策が報告された。金沢工業大学からは、エンジニアを育てるためには、学力と同時に人間力を育成する重要性と方法が報告された。京大の高等教育研究開発推進センターの田中毎実先生からは、ＦＤ活動は各大学が持つ諸条件の個別性の中で、学生教育の「最適解」を探すものという指摘があった。教員養成大学として本学も全力を挙げて、学生を育てるための最適解を探し続けていく必要があるといえよう。

第２日目は、８つの分科会と、４つのミニシンポジウムがあった。私は、第６分科会に参加し、テーマは、主体的な「学び」を目指した学習支援－「グループ学習」と「プロジェクト学習」の方法と実践、というものであった。久留米大学と山形大学の二人の先生から、グループ学習についての実践報告を受けた。私自身も、グループ討議を自分の授業の中で用いているので、グループ討議の時間配分や椅子の配置、学生への指示の出し方など、具体的な進め方についていくつか参考になった。

立命館大学の教員からは、経営学部の環境・デザイン・インスティテュートの授業における「プロジェクト学習」の実際の様子が報告された。パワーポイントによるプレゼンをビジュアルかつスタイリッシュに展開し、プロジェクト学習を進める道具として、受講生の掲示板である「Project Board Mobile」を運用するなど、報告は大変印象的なものであり、年輩の私には決して真似ができない水準であると思った。

ＦＤ委員であるがゆえに今回参加したＦＤフォーラムであったが、報告を聞きながら、各大学におけるＦＤ活動の組織化や、カリキュラムにおける構造化や創意工夫の様子など、ＦＤ活動の進展ぶりには驚いた。本学のＦＤ委員会の会議の中で、ＦＤを本気で行おうとすれば、ＦＤを担当する専門のスタッフ配置が必要と何度も話題になったが、他の大学のＦＤ活動を詳しく聞くほど、その考えも妥当かなと思う。

シンポジウムにおいて、大学教員「渡し守」論があり、学生を入学から卒業に渡し続けている内に教員自身が、学生にとって「お兄さん」「お父さん」そして「おじいさん」と歳を取っていくとの話を聞いて、思い当たるところがある。時代が急速に変化していくのを実感した２日であった。

第14回ＦＤフォーラムに参加して

榊原　典子

「大学全入時代」を迎えて、昨年12月に中教審は「学士課程教育の構築に向けて」※とし大学教育のあり方について答申した。今回のフォーラムはこの一連の流れを受けて、「学生が身につけるべき力とは何か－個性ある学士課程教育の創造－」と題して開催された。

１日目のシンポジウムでは、３つの大学での取り組みが紹介され、フロアとの質疑応答がなされた。その中で、ＦＤ活動に積極的な金沢工業大学での取り組みが具体的でわかりやすかった。理工系の私学で教育方針が明確であることが基本にあると思うが、『自ら考え行動する技術者』育成のため「学力」だけでなく今話題になっている「人間力」の育成にも力を入れている大学である。その話の中で『「学力」×「人間力」＝「総合力」ととらえるとき、学生には「学力」が９でも「人間力」が１では「総合力」は９にしかならないが、「学力」が５・「人間力」が５であれば

「総合力」は２５になると説いている』との説明があった。トリックっぽい言い回しではあるが、多少は納得できるところもある。具体的には、育成する能力に対して評価方法（「試験」「小テスト」「レポート」「口頭発表・実技」「作品」「ポートフォリオ」「その他」）による比率を示し、総合力で評価しているとのことであった。ポートフォリオシステムも充実しており、キャリア教育としての大学教育のあり方が一貫している印象を強くした。

２日目の分科会では「大学での学びの質を高めるために」と題した『高大連携・接続教育』の分科会にコーディネーターとして参画した。先進的な取り組みの報告を受け、参加者と情報交換をしながら議論した。「出前授業」「模擬授業」や「入学前教育」は今や当たり前となってきているが、ここでは学部教育に積極的に高等学校との連携を取り入れている事例を紹介してもらった。一例は高校の海外フィールドワークとコミットする例で、もう一例は特定の高校だけでなく広く地元高校と地域を巻き込んで連携する地方国立大学の事例である。学力的にはいわゆる進学校と一般校との事例であったが、前者では高校生にも登場してもらい成果発表をプレゼンしてもらった。高校段階から知の追究をさせることで、多様な興味関心を引き起こし総合力が期待されるとの話であったが、残念ながら進学校では余裕がなくなってきていてこの様な取り組みは一方で敬遠される向きもあるとの本音も出た。一方、後者の例では、大学生が高校の実態を目の当たりにして、実は７名いた教職希望者が大半方向転換をしてしまい、生きたキャリア教育になった（笑）とのことであった。大学と高校との溝は深く、改めて高大連携・接続教育の必要性を、さらには我が国の教育システムそのものの再考を促される分科会となった。

今回、本学のＦＤ委員会委員であることから、このフォーラムに企画から参加してＦＤ活動の幅広さと奥深さを改めて思い知らされた。ＦＤフォーラムの企画検討委員会メンバーの多くは各大学の専門スタッフであり、一緒に議論していくシンドさが正直あった。しかし、こうやって終わってみると(“大変”と聞いている報告書の作成は残っているが)勉強になったことは多々あり、専門外ながらこの役を授かった意味を改めて思い返している。

※ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
（文部科学省ホームページ「学士課程教育の構築に向けて」）

今回のＦＤニュースでは、大学院教育学研究科の院生を対象とした授業アンケートの結果と、先日行われました第１４回ＦＤフォーラムのご報告をさせていただきました。

お手元には、学部後期授業アンケートの結果が届いているかと思います。是非学生の声をフィードバックしていただき、授業改善に役立てていただければと存じます。よろしくお願いいたします。